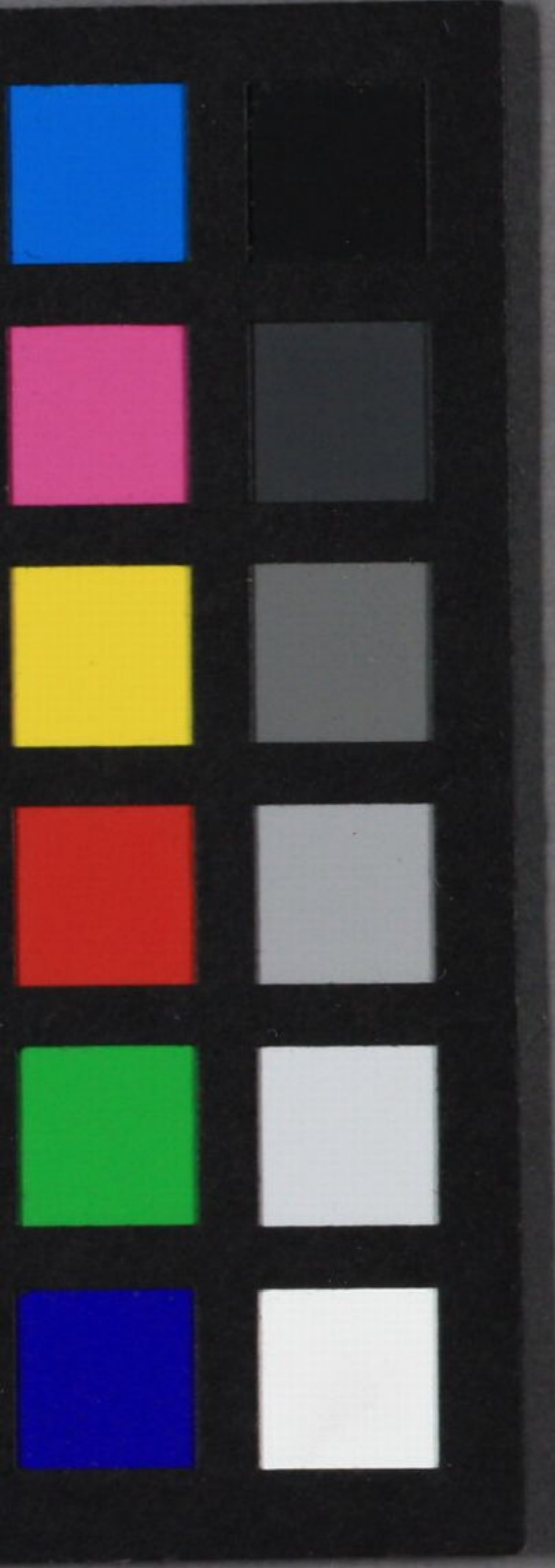


拾遺和歌集

下



拾遺和歌集下

天曆何時より台

天曆何時より台  
天曆何時より台  
天曆何時より台

歌一らす

天曆何時より台  
天曆何時より台  
天曆何時より台

女のみふけしめはつら

天曆何時より台  
天曆何時より台  
天曆何時より台

たいしつ

天曆何時より台  
天曆何時より台  
天曆何時より台

拾遺下



壬生  
右兄  
下  
若春

本  
只

壬生  
右兄  
下  
若春

夢のしるしと恋しおんを又初つらとてあはする人のあはれらん  
からてのしあつこの浦の濱に身をよせしおふつと恋や海らん  
よまおのこころわい恋んおのまおのまおのまおのまおのまおを  
まおのたつらむすわおのひさし先なる物屋にすけり

持世  
敷た

まいつ  
おふまのこころわい恋んを又初つらとてあはする人のあはれらん

いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あつた

あれをいふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あつた

影ららけ

清野のあまのこころわい恋んを又初つらとてあはする人のあはれらん  
大井はらららら後のはたれ半らぬぬ人もあつらりりりりり  
おふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
まおのこころわい恋んを又初つらとてあはする人のあはれらん  
いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
おのこころわい恋んを又初つらとてあはする人のあはれらん  
おのこころわい恋んを又初つらとてあはする人のあはれらん  
いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
おのこころわい恋んを又初つらとてあはする人のあはれらん

指さ下

二

海舟のまき舟に居ぬれど若もつれらむを多岐の上のみこと  
大いなるものしきりうう神あり時雨にたのみのみすす  
あつれとたるとあつれととあつれとあつれとあつれとあつれと

九条  
太左衛門  
とみ人

あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと

中務

あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと

とみ人

あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと

一条  
藤政

あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと

とみ人

たつたつた

あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと

今さら

あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと

寛政  
法政

たつたつた

あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと

とみ人

あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと  
あつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれとあつれと

榊本  
人麿

たつたつた

おかしきものれに様もむらゝの女のまゝを物成おのふらうり  
けきうーけうきく女の時うまひるーけうきうりたれに  
幸も免いた丸井の清くもゆるけきうーけうきうりたれに

つ  
ゆ

後手  
まきかた

いふうあーいふうあそせめけおせのこころのたれすまきかた  
たいー

ま  
人

人志れぬらけりちをそんせういふうとけきも人のあうーあ

人志れぬらけりちをそんせういふうとけきも人のあうーあ  
女力りのあうりつうー

小  
女

人志れぬらけりちをそんせういふうとけきも人のあうーあ  
人志れぬらけりちをそんせういふうとけきも人のあうーあ

人  
志

君いたし袖のうらをわらうりうんまきかたかや社まきけ  
たいー

人志れぬらけりちをそんせういふうとけきも人のあうーあ  
君いたし袖のうらをわらうりうんまきかたかや社まきけ  
天唐神時より合ふ

中  
袖

人志れぬらけりちをそんせういふうとけきも人のあうーあ  
君いたし袖のうらをわらうりうんまきかたかや社まきけ  
天唐神時より合ふ  
たいー

人  
志

人志れぬらけりちをそんせういふうとけきも人のあうーあ  
君いたし袖のうらをわらうりうんまきかたかや社まきけ  
天唐神時より合ふ  
たいー

人  
志

けろお

人志れを思ふらんをさつめつてゆくたひ果て有をさつらん

たのしみ

時雨はまきらうて君恋ふる事ありまほ袖にぬれろ

ちきりくるるるるる女下侍うけい

君恋ふる程のさけの清ぬまうけに地すすれ

は

君はけうたのさつめつたぬ物をあやいや何れもひまきん

たのしみ

あうけいおれをさつらんをさつめつたぬ物をあやいや何れもひまきん

さつめつたぬ物をあやいや何れもひまきん

さつめつたぬ物をあやいや何れもひまきん

さつめつたぬ物をあやいや何れもひまきん

よき人

二十卷

恋二

歌一から

恋つらむかひもあん玉うけあきんあなをいそぎきん

よき人

あなをいそぎきん

よき人

あなをいそぎきん

よき人

あなをいそぎきん

よき人

あなをいそぎきん

よき人

あなをいそぎきん

よき人

あなをいそぎきん

よき人

あなをいそぎきん

よき人

あなをいそぎきん

よき人

女のりんは

結巻

夫ら未のまをとりぬきさちちりまはしほすまふまあしほしほや  
たいしほに

夫ら未  
おのれ

夢うらも思ふくれを縁をいさし何そふにふれりてまうら  
とらん  
しほす

夢よ夢恋ふまふ人下りあひなをれ夢をの後の境しり危  
あつた

逢ふその後の思ふまうらあれい若い物を名をまきらとまうら  
板  
上  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

逢ふそのあはさむわをそ名をいさしを名をいさしを名をいさし  
とらん  
しほす

とらん  
しほす

拾遺下

曉の別まはれをさきつはをきりそらうらわしうらはし  
君夢の泪を結ばいんさあさるいやを祈るあ  
女子物あはれをきりそらうらわしうらはし

いはいはうらうら

かゝるもあし物をあまのこをいひもあれを捨てる我意  
あしほりこそおれをたねおよりあそをほつる袂をさる  
身裁つめいさなをきりそらうらわしうらはし  
けしとあし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ  
とあし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ  
夢よりあし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ  
もろの法時あまに

夢のしあはれうらう人のあしきいひつこおれをいひ  
あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

女のこゝろよりうらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ  
あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ  
あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ  
あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ  
あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ  
あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

左系業  
平教臣

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ

あし物うらう人のあしきいひつこおれをいひ



影しうん

うけ岸の松林うきぬと悲しうん  
逢ふとくハ奈久し一平の河うぬ  
手はうき思ひくく逢ぬぬ  
松板もふもむ板木のあけ  
こぬのぬときうし一平の  
秋葉のまれぬあしたの大  
急使ぬ福をふあうん  
あつてききうし一平の  
あつてききうし一平の

人まう

上人

すけ

上人

あつてききうし一平の  
あつてききうし一平の  
あつてききうし一平の

あつてききうし一平の  
あつてききうし一平の  
あつてききうし一平の

上人

人まう

源順

あつてききうし一平の  
あつてききうし一平の  
あつてききうし一平の

一系  
指政

歌一しらす

我がありてははれしとていかに思ひぬ人た何の意しき  
ふるく物ひははる人す

とみ人  
しらす

歌一しらす

我があふ人の名を承のさぬわれやかきし袖の先も  
袂より涙の涙をみちぬの衣川とそいふるものさき  
衣をよぬまきやと涙の涙をかきとる人のみるへ

とみ人  
しらす

歌一しらす

人のひそ物ひははる人かかきし袖の先も  
人ぬもははれし物と思はは袖の涙の涙をみ  
磯上ふるとふぬにまらうめやまんと妹にひそし物  
後ぬれい今はとあやうあまのたふすはさかひとあ  
五月五日あまのたふすはさかひとあ

大伴  
方尼  
しらす  
とみ人

歌一しらす

いづるも思ふを思ふのあやめをたははれし物  
たのしむらひ

しらす  
とみ人

歌一しらす

かやり物思ふ人の思ふを思ふの思ふの思ふ  
うやうやんとおぼしめす

しらす  
とみ人

歌一しらす

あふれに若くは若くは若くは若くは若くは若くは  
あかきや我れ人の思ふを思ふの思ふの思ふ  
あかきやとあまのたふすはさかひとあ  
後ぬれい今はとあやうあまのたふすはさかひとあ  
五月五日あまのたふすはさかひとあ

大伴  
方尼  
しらす  
とみ人

たのしみ

月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに

たのしみ

月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに  
 月川の山を眺むるに

ふあ

秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕

たのしみ

秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕  
 秋のよは月見の夕の夕

たのしみ

川〜ききぬ

こよひ思ひうつぬる御きの月をよそに都下を思ひ出らん

中宮  
内侍

影〜らむ

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

影〜らむ

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

影〜らむ

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

影〜らむ

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

影〜らむ

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

影〜らむ

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

影〜らむ

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

影〜らむ

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

月影を影ににりつる物ありの思ふ人をも影に思はん

〜

ゆきをまきく

古く城のいさくらのこゝろにたふさのまをまふたさうりや

西暦十五季は厚風より

あつこりまはゆゆうあ城あきりいひわみう一人を急しあ

野一らす

かの宮あはれりるまのとあまをあむ神あやゆそのそけをそあ

まをこれい柳の名あゆけあきり結ああまこる人城あきりあ

の津うあよるとりいんまを柳のいゝ空あな地人のい城

あを向あひまうのあまをゆりかくそまをあけうあ君くれ

冬よりひその山あけのあうそまをまてまをあ人のあうあ

ゆやああゆいいゝまははあ見あたまのまをまてまをま

野一らす

あせこりまきあせのいん人いゝあまのまをまてまのまをま

野一らす

人まら

まら  
まら

我せをあじの宮あやまを君あひんせありまを急あま

らぬ人我まのあはゆのあかあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

あゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいんあゆいん

おき下

十二

あま

あま  
あま

あま

あま  
あま

唐義公家の隣に好む子ありておぼゆるあり  
らほをけりてしむ

思ひたる人けりてしむや隆義我とておつはむとあるあり

秋のゆくはるも葉もももぬる袖のそよぎのみの葉増ゆる  
二百六十をまのすに

我せとていさむきぬとひの秋ゆはるぬ人よりおぼゆるあり

浦山にけりおあはるるもあはるるもあはるるもあはるるも

秋の田舎あはるる人けりてしむや隆義我とておつはむとあるあり

我せとていさむきぬとひの秋ゆはるぬ人よりおぼゆるあり

唐義公

元十

好む

おぼゆる

あり

あり

秋の秋の下葉をこすはむとて人ありてしむとあるあり

志あゆむぬ其の秋秋風吹はるるかきふく物をもと思へ

福ふは下葉をもと思へとみく程にやをとも秋子なりおぼゆるあり

女のりておつはむとて

云の葉ももぬるもあはるるもあはるるもあはるるも

教をぬるもあはるるもあはるるもあはるるも

下葉ももぬるもあはるるもあはるるもあはるるも

我せとていさむきぬとひの秋ゆはるぬ人よりおぼゆるあり

唐義公

元十

好む

おぼゆる

あり

あり

三吉世の香ふこりける山人もぬるをさめて祿をや唱らん

保  
系明

歌一うす

新あつこぬ表あまふ来ぬれまじよあふを待た増水

人まら

巻四

たのしうに

新ぬ髪我らきつゆいふじま人の手枕ぬれま物

全まら

元捕りむこふなりあふふ

時のるをんいふなりある物をいふをさるる昔集らん

実才

歌一うす

衣波の打志きりつあふいさいあふう猶ぬるさうや君

まじん

一条橋政内まふいふんたしふいふまふいひ侍り

たれをんいふまふを待侍るるにまうてあふま

あふま

いふあふまをさるさんこゆるまのいふお出まらふかうり

小式  
命曲

歌一うす

漆より新其分中丹さうりおほく我あふ人なりまぬは

全まら

岩代の世中たたる路むねんをまふにむう思ふも

我言ひを満のふれいふあふにありまをま人のけらん

まじん

浪石より足ゆるふ島の後をさるるまふまふあひす

ま守鏡手にさう持て新刻くこれ世天子あふ時をなま

全まら

ま礼人の笠子ぬかす入ありまままその後のあふんをま

いふ海めやいふ新沼めいふあふまをま人を今まをん

まじん

ま玉川子けらに手つさうけりて手替新人の意あやあを

ま身をもやまあふ新あふまをて城意まをのあふせまら

全まら

ま石上ぬりやま意の非さひたさるる我ま新まをま

まいうまの里替ま物を管棟のまめち新橋の才新あま

まじん

ま限なく思ふあうま新橋柱たひあうになうやまをま

女のりこ新あひま

拾遺下

ありけりひもをれたる志事のあはる本若路の橋はうけるやあを

影しうき

源光

杉とてる若をそ人わつ存をる心り松やうひあうりたり  
磯上市留社社のゆふたすきうあそこのみやひととあひ  
あやう紀人や清あつちをやある神さふ神さひにに  
恒吉乃あう人神あつひととあうあうんとをきく  
忘らうと身をい思をに松をひとと人命のあつとと

右と

はうりうき

何せん子命哉うけてあうひとんいうをやとあふ杉もあうり

実方

たいしうき

ちりちりの敷もあうぬあにあひ俺らん妹うかあうさ  
あうてはらあんとあうさうもあうんあうい命あうあや  
かうはうりあうあ物とあうあうあうあうあうあうあう

あま  
あま

洞川のふたうゆあんあうあうあうあうあうあうあう  
後川若敷あう上をやうあうあうあうあうあうあうあう

あま  
あま

万葉集和の伝をうき

洞川若敷りう川とあうあうあうあうあうあうあうあう

あま

女のそふつうき

人あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あま

天磨以時あうあうあうあうあうあうあうあうあう

あま

わうあうあうあう

か月のあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あま

影しうき

小男若敷あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あま

松き下

十五



津の玉の生田は地のゆくまの法も心致事をさすらん  
津の園り種はつらに法もあつたやといふんはさく  
橋人のかたかりおほひつらさあまらぬ人かおひさる  
種は人か生さくやいさされとまのまを麻ゆつたれ  
信吉の存子おひさるまをみまわあははこひの志ぬ  
や城より濱のまゆとまをさすつらぬさけり仲津もあ  
居て身もさすまをさすつらぬさるは

か  
り

さぬうらんのかをえんまの浦の濱ゆいといふらん  
かしの山はつら法もさすつらあつたのはこの人  
法もいれさ

天  
下

世の人りをよらぬ物のゆのぬのを井もさぬ思ひあうら  
あまのあつたけり見ゆ物なふ都のあつたは法も  
まぬをよらぬさくつら法もいれさ

よ  
こ  
人  
に

秘ぬあまのらんらんらん人よりも我をま守田のつらかひあお  
たらあまの親のつらこのまゆありつらあまもさる妹も達す  
いさやゆつたあまもさるあまもさるあまもさるあまもさる  
たらあまの親はつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
とまもさるあまもさるあまもさるあまもさるあまもさる  
あまもさるあまもさるあまもさるあまもさるあまもさる

よ  
こ  
人  
に

らちあまのつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
たつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

中  
務

らかりあまのつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
あまもさるあまもさるあまもさるあまもさるあまもさる  
手枕のすまのつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
吹風をりあまもさるあまもさるあまもさるあまもさるあまもさる  
そのまにさるあまもさるあまもさるあまもさるあまもさる  
まゆのあつたけりあまもさるあまもさるあまもさるあまもさる

よ  
こ  
人  
に



あつたまの夢と新りしよの夢のうらみの法をまわたり  
あつたまの何れも命をまひたるとすれはゆきまはりて  
あつたまの律のいふ法を越えし今も我身のまじりし

今更

意五

善法はめあまきかへはるる母のいれ法より

ら

あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし

影一のす

信吉の岸にわたりて法を越えし今も我身のまじりし

人まら  
よまら

あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし

あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし

人まら

あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし

あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし

あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし

大平

影一のす

あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし  
あつたまのいふ法を越えし今も我身のまじりし

よまら

うゝゝゝ物うゝゝ人の意ゝゝゝの川を母のふたつゝらん  
身のをねを人の法ゝゝゝと心とを我世の心とゝゝゝのうゝゝゝ  
法ゝゝゝゝゝゝ物うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
んゝゝゝゝゝゝゝゝ物中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
法中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
物いひ得ゝゝゝゝゝゝ女の後中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
付ゝゝゝゝゝ

さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
たいゝゝゝゝゝ

さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
大らゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一系  
橋改  
謙徳

いせ  
後永  
つゝ  
ゆゝ  
人

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
降ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
天意新ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
君ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

女のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
風をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
歌ゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

原  
系明

あゝゝ  
あゝゝ  
あゝゝ

志賀の浦の釣りもせしる漁を新町のうぢ人を頼りて  
なまじりての山路の人もあつてゆくに新町のうぢ人を頼りて  
糸織の浦の時が新町のうぢ人を頼りてゆく

糸織  
三つ

志賀の浦の釣りもせしる漁を新町のうぢ人を頼りて  
なまじりての山路の人もあつてゆくに新町のうぢ人を頼りて  
糸織の浦の時が新町のうぢ人を頼りてゆく

糸織

志賀の浦の釣りもせしる漁を新町のうぢ人を頼りて  
なまじりての山路の人もあつてゆくに新町のうぢ人を頼りて  
糸織の浦の時が新町のうぢ人を頼りてゆく

糸織

志賀の浦の釣りもせしる漁を新町のうぢ人を頼りて  
なまじりての山路の人もあつてゆくに新町のうぢ人を頼りて  
糸織の浦の時が新町のうぢ人を頼りてゆく

糸織

志賀の浦の釣りもせしる漁を新町のうぢ人を頼りて  
なまじりての山路の人もあつてゆくに新町のうぢ人を頼りて  
糸織の浦の時が新町のうぢ人を頼りてゆく

糸織

糸織

志賀の浦の釣りもせしる漁を新町のうぢ人を頼りて  
なまじりての山路の人もあつてゆくに新町のうぢ人を頼りて  
糸織の浦の時が新町のうぢ人を頼りてゆく

糸織

糸織

糸織

二十

糸織

まをん  
しん

あまのりあまをん信出のあいまけと只我うつれつとあえり  
急使ぬうけあまをんを慰めんつれあまの涙あまをん  
かくをりのけしとあまをんを慰めん我うつれあまをん  
さふりえに物に思ひひたれあまをんを慰めんたつとあまをん

くまら

お大層女師とせ侍もあまをんを慰めんあまをんを慰めん  
しん

天啓  
山本

古哉けりかきと思ふとあまをんを慰めんあまをんを慰めん  
あまをんを慰めんあまをんを慰めん

お信

あまをんを慰めんあまをんを慰めんあまをんを慰めん  
あまをんを慰めんあまをんを慰めん

お信

あまをんを慰めんあまをんを慰めんあまをんを慰めん  
あまをんを慰めんあまをんを慰めん

あまをんを慰めんあまをんを慰めんあまをんを慰めん  
あまをんを慰めんあまをんを慰めん

あまをんを慰めんあまをんを慰めんあまをんを慰めん  
あまをんを慰めんあまをんを慰めん

あまをんを慰めんあまをんを慰めんあまをんを慰めん  
あまをんを慰めんあまをんを慰めん

あまをんを慰めん

あまをんを慰めんあまをんを慰めんあまをんを慰めん  
あまをんを慰めんあまをんを慰めん

あまをんを慰めん

あまをんを慰めんあまをんを慰めんあまをんを慰めん  
あまをんを慰めんあまをんを慰めん

あまをんを慰めん

あまをんを慰めんあまをんを慰めんあまをんを慰めん  
あまをんを慰めんあまをんを慰めん

あまをんを慰めん

あまをんを慰めん

あまをんを慰めん

正徳十五年富田藩御

なまのれい遊のあまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

つゆ

正月おんくまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

右のつづきに信長公のりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

中務の  
を敷王

あまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

信長公の  
後

このあまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

よえん  
しん

梅の花よりのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

中務の  
を敷度

いふ年梅のりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

一葉  
梅

と唐法時大さんあまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

一葉  
梅

つげあまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

一葉  
梅

あまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

原寛行  
おん

内裏のりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

伊藤  
おん

かきあまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

伊藤  
おん

かきあまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

伊藤  
おん

かきあまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

伊藤  
おん

かきあまのりぬれぬむすしなげあまのりゆりん

伊藤  
おん

くく浦ままうてけくありけりさるあなたくて  
と女作りあり

妻は  
山

山をぬれくく浦の山けさるくくてさるの中にもくくあか  
山を十五年毎に海へ下りてさるをけりて山をけり  
いふ人あり

けり  
ゆふ

あかゆきくくけりてさるをけりてさるの中にもくくあか  
か一葉のあかひささるをけりてさるの中にもくくあか

か  
あ

田子け浦小まのさるくくくくくくくくくくくくくくくく  
山にけひて女をけりてさるをけりてさるの中にもくくあか  
けりくく

いふ人  
くく

あかゆきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
人あかりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
さるのさるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか

中  
内

女のさるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか  
けりくく

さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか  
さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか

さる  
あ

さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか  
さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか

あ  
い

さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか  
さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか

あ  
あ

さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか  
さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか

あ  
あ

さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか  
さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか

あ  
あ

さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか  
さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか

あ  
あ

さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか  
さるをけりてさるをけりてさるの中にもくくあか

拾遺下

廿三





いづれにまゝにたゞしき人おのまゝの橋のあを渡したるは  
持世にまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
あまの人のまゝにたゞしき

壬生  
おん

あまのまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
たゞしき

内守師  
持世

あまのまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
あまのまゝにたゞしき

つ  
ゆ

あまのまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
あまのまゝにたゞしき

信正  
画昭

あまのまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
あまのまゝにたゞしき

夏永  
大蔵

世中にたゞしき物あゝのやうにやまをさるるん  
あまのまゝにたゞしき

おん

あまのまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
あまのまゝにたゞしき

持世

あまのまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
あまのまゝにたゞしき

夏永  
持世

あまのまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
あまのまゝにたゞしき

おん

あまのまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
あまのまゝにたゞしき

持世

あまのまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
あまのまゝにたゞしき

持世

あまのまゝにたゞしき橋もあゝのやうにやまをさるるん  
あまのまゝにたゞしき

持世下

廿五

石山結たりのまへにけりたる橋の本に土付けり

よみ人  
しうに

うらめしうくうらめしう山橋ありぬ白ひ城風もまきうせ

敷交式に於てけりまこのますめいせうたるもけりたる

つら  
ゆふ

くくこれあにまあし橋をわめよきせれを福うけにたり

正長法時南無ふちり法にけりたるもまきうせ

よみ人  
しうに

橋をみよきけり山に影いあれいまに橋よぬれしを思ふ

手あけりま法たうらいせしあも身まふる世思ひしを

きうふ

年あにまのれ世に水にわつぬあつ橋をそまきうせ

二月うらふ月まきうる年八重やまのあやせよみけり

あつ

浦人まき城網にむすまや橋をまきうせしを引らん

正長法時南無ふちり

つら  
ゆふ

わかこれに風いり吹時を信のむしに橋をまきうせ

まきうせまきうせまきうせまきうせまきうせまきうせ

よみ人  
しうに

木のりまのまきうるまきうるまきうるまきうるまきうる

はまのまきうるまきうるまきうるまきうるまきうる

よみ人  
しうに

けりたるまきうるまきうるまきうるまきうるまきうる

けりたるまきうるまきうるまきうるまきうる

よみ人  
しうに

まきうるまきうるまきうるまきうるまきうるまきうる

まきうるまきうるまきうるまきうるまきうる

拾巻 廿六

~~~~~

答の左様と申す採めりて思はれ申す子ありてはまほしき事

左大臣

~~~~~

りて之りまをいひてを思はれ申す山かきれり思はれ申す

上任

四月一日よみ侍りたり

上りかきし時言をたまふ御旨一思はれ申す山かきれり

侍

正徳四年九月廿八日信を信六十架系極のいやす

所は信六より申す信極のいやす極のい

松風は信六より申す信極のいやす極のい

侍

正徳四年時極極の極極のいやす極のい

のいやす極のいやす極のいやす極のい

極極のいやす極のいやす極のいやす極のい

侍

左大臣は申す申す申す申す申す申す申す

極のいやす極のいやす極のいやす極のい

二任

は申す申す申す申す申す申す申す申す

上大臣

~~~~~

申す申す申す申す申す申す申す申す

侍

~~~~~

申す申す申す申す申す申す申す申す

侍

申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す

侍

申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す

~~~~~

申す申す申す申す申す申す申す申す

侍

~~~~~

申す申す申す申す申す申す申す申す

侍

~~~~~

拾遺下

廿七

三川の山時より河洲を平たすなり此時に名ありき

大和後  
橋親

坂上の赤女子はうりしき

大伴  
係兄

古里をたじの宮本時より後をわのふいりしりつあまや

健  
治

隆成りのりる後城を築これより名は美とふきりそむき

長七十七月十四日

この文のむきしこれの折をてははれ有りの数もあはれき

中  
お

一乗後改のゆきうこあうにゆきくみ女ゆき

くし時

あけしふかきふりこれぬ時ひれうあはれぬお橋子のふ

橋を后  
言橋子

影しらす

いづしに老ぬるうかすりおわあまこのまは下あまを美あはれ

しつ  
ひ

新秋

厚徳子七月七日

七夕のあけしきうんさうふの系かはうりまつらん哉

源  
明

系歌宿の厚徳に七夕のうりたるあたまのむす

しきしき

娘女のあうぬあしゆしををるしゆあうり美のまゆき

ゆ  
り

七夕後知るしゆのふはうりしき

お左あまの海をすらん七夕のあうぬ別のしきを美は

つ  
中

影しらす

後をたや舟をよよしをすりてはひきますふなをあは

今  
ら

七夕のあけしきうんさうふの系かはうりまつらん哉

七夕のうりしきあまの川こよひをのりいおわゆしは

王  
唐

影しらす

よまきみうあうすあは七夕の洞入り玉の陸とわあはらん

よ  
き

天禄四年五月廿一日系歌宿の又うりしき

橋を后



舟寄新井中にてある女医をわきぬ人いありしとを思ふ  
系船院のほろ風不秋の世にいつのふあきあき

つひ

舟寄と不敷多のあはれ折つてあふれつく毛唐をすくも  
とて船ついでいふとをくのめみまをま

つひ

小倉山崎にまなほしし時若の屋不きと秋をまする人のま  
影しらす

つひ

こそふまゆにふる物うれも落葉もまよふすつひりたる  
ゆりあし房を鳴たるまへ人たる地中をまよふあうん

つひ

中宮のうまにおひさましつる時月のあうれ秋とあ  
よみゆりたるに

つひ

九重の内とふあうり月鏡もあたるをををふかゆるりれ  
西暦十九年九月十二日以内原屋ま月記のりそ  
百歩の大字あうりいすふををみるゆ地する秋のよの月

つひ

八月子人のあはれつりあふりまらうとあまこひりそ  
月哉をえ

つひ

ふはあにわらふる月ののくもれをあみあふ人の秋あよたれと  
清徳公五十架の屋風をり

つひ

とらふ井の程をまらふおあはれ実つらゆるゆの帯の約  
たひしらす

つひ

あたまぬ人のまよふあきあふ秋のつらふもあまきになり  
屋まに村面降る日とらふとつひもあまき秋のまあま

つひ

時風が吹れあふりそ我のあはれあうらふとあまの蝶のまきの程を  
お大物宮玉家の屋風に

つひ

怪の紅の松を秋風吹うらああうすまの沖津津あう波  
影しらす

つひ

秋風が吹く吹たるあきあふりあまあうらふといひあまあ  
影しらす

秋風の日はあまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
秋風の日はあまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり

秋風の中を歩くと  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり

かめこゆの池に  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり  
あまもいと我者も秋言のこりもあはれを付たり

松をこ下



あつても見付を

あつても見付を  
たのしむらむ

あつても見付

久留米は自らもあつても見付を  
あつても見付を

あつても見付

あつても見付を  
あつても見付を

あつても見付

あつても見付を  
あつても見付を

あつても見付

あつても見付を  
あつても見付を

内容書は届ぬに

あつても見付を  
あつても見付を

あつても見付

あつても見付を  
あつても見付を

あつても見付

あつても見付を  
あつても見付を

あつても見付

あつても見付を  
あつても見付を

あつても見付

あつても見付を  
あつても見付を

あつても見付

括弧下

三十二



子孫傳抄のいふ如く、雪降りて其の如く、  
猶如く、雪降りて其の如く、

雪降り  
ゆき

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り  
ゆき

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降りて其の如く、

雪降り  
ゆき

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り  
ゆき

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り  
ゆき

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り  
ゆき

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雜賀

雪降りて其の如く、

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り  
ゆき

雪降り

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り  
ゆき

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り  
ゆき

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降りて其の如く、  
雪降りて其の如く、

雪降り



東之桑田の如き大匠法し侍々るおかんとちめかいらあ  
そりてふりよ及侍々るあ

天う世にの氣度りかろし侍々るおかんとちめかいらあ  
お大匠法し侍々るあ

そりてふりよ及侍々るあ  
侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

中お侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

侍々るあ

とやうとてあつたつるまののれ

よいかたうとつたつたのこりうとつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

天啓  
出書

あつたつた  
あつたつた

あつたつた  
あつたつた

あつたつた  
あつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつた

あつたつた

あつたつた

このれは侍をれまかのさへはゆいさあき物  
いひゆるふとあははるわいしれまひつう  
いありさふまはあははるわいしれまひつう  
かこれまふ人かふさうさうさうははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう

よき人

夫さういふよあはるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう

よき人

こぬ人とあはるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう

よき人

あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう

よき人

あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう

あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう

よき人

あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう  
あははるわいしれまひつう

よき人

拾遺下

三十八

影一す

いふふらむきつらん 蓬生は人比 通らぬ 赤ややめり 是

赤三葉にまじりし 出るるの 傳々す

雨なすそ 雨の敷人も 赤紅 赤紫を 赤紫より 赤く 赤く 赤く 赤く

まじりし 赤く 赤く 赤く 赤く

赤い 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か

中物 中物 中物 中物 中物 中物 中物 中物 中物 中物

赤く 赤く 赤く 赤く

夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢

影一す

人 人 人 人 人 人 人 人 人 人

左大物 左大物 左大物 左大物 左大物 左大物 左大物 左大物 左大物 左大物

まじりし 赤く 赤く 赤く 赤く

是 是 是 是 是 是 是 是 是 是

上人

赤三葉の 女也

大物を 赤光

赤三葉 赤光

源公忠

うれい

うふふらむきつらん 蓬生は人比 通らぬ 赤ややめり 是

赤三葉にまじりし 出るるの 傳々す

雨なすそ 雨の敷人も 赤紅 赤紫を 赤紫より 赤く 赤く 赤く 赤く

まじりし 赤く 赤く 赤く 赤く

赤い 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か

影一す

夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢

影一す

人 人 人 人 人 人 人 人 人 人

左大物 左大物 左大物 左大物 左大物 左大物 左大物 左大物 左大物 左大物

まじりし 赤く 赤く 赤く 赤く

是 是 是 是 是 是 是 是 是 是

うふふらむきつらん 蓬生は人比 通らぬ 赤ややめり 是

影一す

赤三葉

人まじり

赤三葉

人まじり

赤三葉の 女也

大物を 赤光









指のさすまへをみればはげ敷かきぬさのまゝにあるふ

歌一らに

風をぬき雲の首を垂れたるすれいあやうやけき人のんり

紅糸女子をさうりけり

久方の雨の降り残たは指ゆへをいれりわりのれたるまきり

なまはまらるるまきりさうりきり女のぬかこひさる日

さぬけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

あんまりさうりまきりさうりけりけり

白降るる屋敷なすけりさうり水滸すまゝの影のこゆし

よきとも白降るあけけりさうりまきりぬに影のこゆし

白銀の時を空を空を空より一歩のふこの洋子けり

けり

まきりのかきりやけり小雲の影けりぬ出ぬ人のなるふい

たやけり

いそいでの中にもなる結ひ結ひもさあはむのけり

女のいそいでをさあはむはけり

なかのともあはれともあはれぬさ菊の志をな築世哉ふいさ

お君守おまきりかむすめけりまきりかよひをわと

なまはまらるるまきりさうりけりけり

そとでけりける哉けり

細川あまきりもあまきりもあまきりもあまきりもあまきりも

あまきりもあまきりもあまきりもあまきりもあまきりも

あまきりもあまきりもあまきりもあまきりもあまきりも

世中をさあはむ物とやけり

あまきり

つよきいさなをま物と思ひつゝ久しきことさたのみやいさぬ

あまきり

あまきりもあまきりもあまきりもあまきりもあまきりも

指をさす

つゝある中侍たる女の姿をせいのし侍をれと

よこ人

一条橋政いもるんうこといひ侍らりたりとれと

石見かこ甲りいつらお侍らりあうの裾をそらにききもるんより

本侍

一条橋政下らうに侍たる時承意の女は侍

よこ人

たる女は思ひて物のひ侍たるお侍らりあうとれと

つら

いひて侍たれと侍りしるもじりいなとつひつひし

つらとれと

それなくぬゆもあうとを思ねといひにうりを身にとめん

よこ人

侍する約のつまはくきつら君らとを承おと人たり

よこ人

君とれに侍の神とつらめとつまはくきつら君らと

つら

い侍まじりあうと思んこ橋の山にありあつたをみる

つら

い侍まじりあうと思んこ橋の山にありあつたをみる

つら

人なりとて侍をれと

よこ人

あつたをみるい侍まじりあうと思んこ橋の山にありあつたをみる

つら





影しらす

墨波の衣の袖の雪をなれや洞の初結るを待降らん

よみ人

挙賢

飛人正五位下  
左を右の廿五

義孝

五位上右を右  
左を右の廿五

天正二年

九月十六日

同日午時徳徳公の御方ありて

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

むらゝを侍しんくおちくおくなりこころをなけ

えをえ侍る

世中にあまのこころあはれを起しおほくも来にたるとの御

後宗  
為光

五

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

おやふせを侍る侍るこころをこころのこころ侍る侍る侍る

なまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

影しらす

公任

いせ

うらゝのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

順らまたりあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

よみ人

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

ゆり

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

後宗  
為光

返

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

あまのこころあはれあまの身なれをうよふぬほをたれ海らうん

いせ

指巻下

四十七





まはりのゆくひまをけりまはるゝあまのこゝろよまはるゝこゝろ

いそんおけりてたてあつたぬつきの時たのしみ

いも山は思ふおもひのまはるゝまはるゝまはるゝあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

まはるゝあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらん

あつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらん





此の書は、  
 明治廿二年七月十日印刷  
 同 年同月十五日出版  
 故 人  
 藤原公任  
 東京府平民  
 江嶋伊兵衛  
 日本橋通四丁目十番地  
 同  
 江嶋鴻山  
 京橋區築地一丁目八番地  
 印刷者

拾遺和考集下終

